

〔特集にあたって〕

越境者とミクロ・リージョンの創出

王 柳蘭

本特集のねらい

本特集は、人と人との関係性によって可変的に生成されていく地域のダイナミズムを越境者の視点から検討する。その特色は、地域の内側で暮らす人びとのまなざしに依拠し、多様な主体が自己意識にもとづく相互作用によって生成していく場や空間的広がりに着眼する点にある。ここでは、自他の境界に影響を受けつつ、人と人との相互作用から創出される社会文化的、政治的、経済的な場や空間を「ミクロ・リージョン」とよび、この概念を援用して、アジアにおける越境と地域の関係性を読み解いてい

く。

キーワードとしての移動・越境は、国民国家の求心力の低下やグローバルゼーションの影響下にある現代世界を理解する上で、人文・社会科学系の分野ではこれまで大きな注目を集めてきた。移動や越境がもたらす地域動態、あるいは人と人が織りなす地域の重層性や可変性については多く議論されてきた（木村・上田編 1997、松本・山田編 1998、坪内 2009）。また国民国家や近代への問題提起として、移動者や越境者はディアスポラというタームで読みかえられ、その言説、歴史や文化実践の現代的意義について、脱領域性との関わりから議論されてきた（アーリ 2006、クリフォード 2002、コーエン 2001）。さらに、これまでの移動研究が、移動／定着者といっ

た区分けを暗黙の前提として、移動を一時的、例外的、逸脱的な現象としてみなす非対称性によって、国民国家が克服すべき「課題」や「問題群」として移民を認識し、研究の枠組みを規定してきたと指摘されている（伊豫谷 2007: 9）。このように移動や越境についての議論は多様な角度から蓄積されてきた。これに対し、本特集では、移動を契機にして生み出される空間のあり方とそのヴァリエーション、いかにえるならば、越境者が移動過程において、どのように他と区別されるような領域や空間を主体的に形成しかつ意味づけているのかという問いをたてている。

さて、越境者と地域の生成を問題にした場合、「地域」のリアリティは場所によって、また歴史的過程のなかで実に多様な相を呈する。そして何が「地域」であるかという問題は、地域をどのような単位でくくり、結びつけ、どのレベル、どの範囲に設定するかによってさまざまなアプローチと理解の仕方をとりうる。

東南アジアでは、地域の固有性とその形成論理を自然地理的な環境とその諸条件から説明する研究が蓄積されてきた（高谷 1996: 2006、坪内編 2000）。その際、東南アジアの地域性の特徴のひとつとし

て、移動性の高さや人口の非定着性が指摘されてきた（坪内編 2000）。また東アジア、とくに本特集で取り扱う中国は、異民族間の接触・競合と人口の離合集散によって今日の版図が歴史的に形成されてきたことは周知の通りである（葛・曾・呉編 1993）。このように中国や東南アジアにおける移動は、人々の生活様式のひとつとして組み込まれ、非日常な人的営為というよりはむしろ常態としての存在様式であるといっても過言ではなく、越境や移動といった現象を地域生成の観点から捉える視座は不可欠である。

また、アジアに限らず政治学や経済学の分野では、地域は、既存の国家をまたぐ政治、経済的な統合や国家内における地域主義の現代的動態と政治経済的力学との関係性から説明が進められてきた（山本他 2008）。歴史学の分野では、地域を超歴史的で自明な地域区分とする見方ではなく、課題により可变的であり、伸縮自在であると指摘されてきた（古田 1998）。他方、人文地理学の分野でも、地域を成り立たせる空間を単なる客体的な構造ではなく、幾重にも絡んだ社会的意味の層からなる社会的経験として捉えている。とりわけ、20世紀後半から21世紀初頭にかけて、ポストモダンの地理学が台頭する

と、多数の人間のあいだに存在する無数の差異への感受性をふまえ、多様な人々が「社会―空間的」なプロセスに対してもたらし、織りなす、多様なインプットや諸経験を認識し、表現する営為に大きな関心が払われるようになった (Cluke et al. 1991)。

人類学においても、地域に対する理解は、単なる環境や行政による区分とは異なり、さまざまな歴史と文化を担った行為者が相互の対話・交渉を重ねて作り上げられる場として捉え直されている。このような意味での地域を対象とする場合、研究者の視点や問題意識による地域設定のみならず、対象とされる地域を作っている住民側からの地域の捉え方も重視すべきであると指摘されてきた (川田 2004)。また、こうして生成されていく地域は、地域の内側に生きる人々が社会的影響力を生み出す対象やアイデンティティを構築する場であり、社会的関係がシンボル化され、表象され、可視化される場でもある (cf. 林編 2009、石川 2008、西井・田辺編 2006)。

しかし、こうした「人―地域空間」に関する先行研究においても、移民や越境者と地域の関係性に着眼した研究は少ない。本特集の意義は、越境者がどのように「地域」に対して主体的に働きかけるのか、どのように意味づけしながら生きる場としてのミク

ロ・リージョンを創出し、葛藤を含みつつも共存しているのかについて、その実態と認識をフィールドの事例から具体的に検討することにある。

ミクロ・リージョンの特徴として第一に、地域の内側に生きる人の交渉、対話やネットワークなどの相互行為に基づく社会関係の集積によって生じられる場が構成されている点にあるが、その空間的広がりは無制限ではなく、自己意識に基づいて特定の場 (locality) と限られた領域 (regionality) をもつ点があげられる。第二に、こうして生成される境界は通時的・共時的に伸縮するが、その空間内では、多様な差異や葛藤を含みつつも、自己意識に基づいて同一の文化的社会的価値観や規範を維持させていく上で不可欠な集合的な拘束力や力学が働く。第三に、境界によって囲まれた空間は、可視化された表現体をしばしば伴っている点で継承性がある。たとえば、本特集でとりあげる各種宗教・文化施設 (モスク、中華会館、寺院など) の存在がミクロ・リージョンの維持と継承にとって行為者に大きな影響を与えている点からも読み取れる。第四に、そこで立ち上がるミクロ・リージョンは、必ずしも公権力が形作る既存の地域にとって代わる空間として制度化されるとは限らないが、公権力への交渉、行政・政

治への働きかけや承認を求める場として潜在的な政治性をはらみもつ空間的媒体である。

したがって、マイクロ・リージョンは、特定の場と領域をもち、他と区別しうる文化社会的、政治的、経済的な価値体系や規範が当事者に作用する境界によって生成され、かつ可視化される空間であり、単なる生活圏というよりは公共空間^{*1}としての性質に近い。

本特集の構成^{*2}

以上のようにマイクロ・リージョンを理解した上で、以下八編からなる本特集では東・東南アジアにおける越境者を対象に、彼らが生きる個別社会の地理的歴史的事例に即した形でマイクロ・リージョンの定義や捉え方が提起されている。もつとも、本特集はマイクロ・リージョンという概念を用いて、人と人とのつながりを軸にした下からのまなざしで「地域」を問い直す概念として援用するが、地域を分析するためのモデルを提出することを目指しているわけではない。あくまでも個別地域の抱え込む地理的独自性と、越境者が立ち上げていく多様な社会関係

の集積としての歴史性を反映させながら、移動・越境者の視点からみたマイクロ・リージョンを多角的、多声的に捉えていく試みである。

第一部では「コミュニケーションと地域の接合」、第二部では「越境の論理と秩序」に焦点が当てられる。各論はそのひとつの部にのみ収斂されるというものではなく、互いに双方の視座を含蓄していると同時に、マイクロ・リージョンを理解する上で補い合うアスペクトを示していると理解されたい。ただ、各論の部への配置はそれぞれの論文の力点の違いを反映させるための工夫である。

第一部「コミュニケーションと地域の接合」では、国際関係論や政治学、経済学において論じられる地域の範囲が国家を単位とした統合形態の拡大あるいは細分化、分権化といったフォーマルな領域に力点が置かれているのとは対照的に、地域の範囲を越境者の経験によって基礎づけられた文化的、政治的、宗教的などといった社会関係の集積として創り出される場として想定している。すなわちこれらは、越境者におけるマイクロ・リージョンの成立・多層性・変容を扱う論文群である。

園田論文は、一九世紀後半から二〇世紀初頭の広東から北アメリカへ渡った華僑の第一世代を事例

に、海外移民コミュニティが中国本国の外交出先機関とつながることによって作られていく、政治や文化的な「場」をマイクロ・リージョンとして捉える。

それ以前に作られていた自律的な移民コミュニティが「本国」をひとつの上位装置としてほしいに制度化されていくさまを、サンフランシスコやカナダにおいて成立した中華会館の存在から描き出している。とりわけ園田論文は、「近代国民国家化」の一局面である中国の在外常駐使節制度による官と華僑の商との接触や相互交渉が、政治的・文化的正統性を「本国」中国に求めるよう移民に影響を与え、本来、移動を管理し秩序維持のための工夫がなされた同郷会館が、中華会館という自治や自助のシステムへ収斂したと指摘し、両者の近接性によって形作られていく政治的、文化的空間としてのマイクロ・リージョンの歴史的生成プロセスに着眼している点に特色がある。

山田論文は中国から西はインド北部のラダック地方まで広がるチベット社会を対象に、国境を越えた移動、とくに不可抗力によって生み出された難民的移動を契機に顕在化する「地域主義」と「汎チベット主義」の歴史性とその動態を描き出している。山田は、「地域主義」を一定の空間的領域を居住地あ

るいは出身地などとして日々の営みを共有することから生み出される文化的「一体感」や帰属意識の形成という定義のもとに用い、それが「顔の見える者同士」によりマイクロなレベルにおいて形成される点において、政治学や経済学における超国家的あるいは超地域的概念としての地域主義と異なるマイクロ・リージョンリズムを提唱している。

王論文は、タイに渡った中国雲南系ムスリムが、中緬泰の政治的経済的変動のなかで、他者との相互関係を変化させながら移住先において宗教的社会的空間を形成してきたプロセスと、中国の改革開放政策以後、彼らが故郷中国と新たに築いてきた宗教的ネットワークを記述している。すなわち王論文においては、避難民的移住性が強かった雲南系ムスリムがさまざまな歴史的諸条件に適応しながら他者との差異化を図る一方、自らの生きる空間としてのマイクロ・リージョンを可変的に作り替えながら生き抜いてきたさまを越境者の歴史的経験から捉えている。

第二部「越境の論理と秩序」では、移住者の社会内部へとフォーカスを絞った論文群となる。越境者が創出するマイクロ・リージョンがどのような内的論理によって維持されているのか、どのようなメカニズムを有しているのか、どのような意味を付与され

ているのかを問いかけている。国家や国際関係をはじめとするマクロな制度やグローバル化が地域社会に及ぼす影響をふまえつつ、しかし法制度上の変化のみをなぞることで終始することなく、マイクロ・リージョンの創出と維持のメカニズムを越境者の視線にそって記述することを目的としている。

小西論文は、中国チベット社会におけるボン教寺院を対象に、地理的実態としての地域にとどまらず、親族関係や僧侶の移動、寺院間のネットワークといった多元的な関係性が絡み合いながら宗教的実践の場がたちあがるさまをマイクロ・リージョンとして捉え、そのなかでいかに宗教復興と宗教知識の継承性が保持されたのかについて論じている。小西論文はマイクロ・リージョンを支える秩序を焦点化している。

木曾論文は、過去約四〇年にわたって国内外の労働市場に女性労働者を送り出し続けてきた東北タイ農村地域における女性の出稼ぎの動態を検討している。そのことによって、送り出した地域における内部者の論理としての移動のメカニズムを、女性の「母」役割の分担から描き出した。木曾論文は、移動する女性に着目し、出稼ぎをめぐる地域社会の規範を共有する人々によって作り出される相互行為の

場をマイクロ・リージョンとして捉え、経済的な要因によって移動経験や当事者の論理がしばしば捨象されがちな出稼ぎという現象について新たな見解を提示している。

渡邊論文は、フィリピン・マニラのムスリム移民を対象に、婚姻実践の多様化からマリッジ・スケープ（通婚圏）の変動と、異なる社会秩序の並立状況について論じている。渡邊は、国内の民族紛争や国際的な出稼ぎブームにより、地方から都市へ向かうムスリムの移動理由に共通点が認められるものの、移動先での多様な経験によって、婚姻をめぐるいくつかの相違する生き方の選択や指向性が見られると指摘する。こうした婚姻によって受け入れ社会との結びつきを強めたり、郷里とのつながりを維持しようとするなど、社会関係を構築する場としてのマリッジ・スケープを、渡邊論文ではマイクロ・リージョンとして捉えている。

比留間論文は、いまだ詳細な事例研究が不足している在ラオスのベトナム系移民社会に関する予備的調査に基づき、一九世紀末以後に激動するインドシナ現代史を生き抜いたベトナム系移民が移住先のラオスで形成した墓、寺、小学校に着目している。比留間はこれらの物理的諸環境がベトナムーラオスの

二国間の歴史的関係に規定されつつも、ベトナム系移民にとってラオ人社会と共存を図る文化空間として認識されてきた点に言及し、移民のミクロ・リージョンの創出と維持を考える切り口を示している。

吉田論文は、ラオス村落社会における出家行動の変遷をラオスにおける仏教の制度化を縦軸、その影響を受けつつ地域の歴史的文脈において実践される仏教を横軸として記述している。吉田は近代化を押し進めるラオスのサンガ制度が、農村から都市部への出家を促す外的要因になっている点を指摘し、出家が仏教の知識をめぐる継承装置としての機能から、しだいに世俗教育の獲得とそれがもたらす経済的・社会的成功としての回路として読みかえられているさまを記述している。吉田論文は、出家者の視点から教育システムや国家といった世俗の領域と宗教が交差しながら立ち現れる場をミクロ・リージョンとして捉えている点に特徴がある。

本特集は冒頭でも述べたように、越境者と地域との関係性を主題にしたものである。近年のトランスナショナルリズム研究やディアスポラ研究が脱領域性や脱地域性との観点を声高に主張しているのに対して、ここでは、越境者が多様な他者と共存しながら

自らが生きる確かな拠り所を国民国家内部あるいはそれを超えた空間に保持し、創出していくあり方をミクロ・リージョンと捉えた。その視線は、ナショナルな枠組みを批判する手段、あるいは政治的道具として越境者や移動者を位置づける議論を超えて、地域固有の社会的現実から見える越境者や移動者の生のあり方に着目することを意図する。また、移民から市民へといった同化あるいはナショナルリズムへと単線的、一元的に自らの生のあり方を帰属させることが国民国家に生き残る移民の姿と了解されてきた移民像への問い直しでもある。今後は、越境者との地域との関係性という主題をさらに深め、国家との共存、他者との共存など多様なアクターと越境者が交渉・妥協・自己主張していくプロセスとその戦略について議論することを通して、固定的・制度的な地域像ではなく、越境者を主体にした多動的な地域像を構築できるのではないかと考えている。

●謝辞

本稿の執筆に際しては、前職場の京都大学杉島敬志先生ならびに現在の受入先の林行夫先生との議論やご助言による示唆が大きい。また、執筆者のメンバーや李仁子さん、査読ならびに編集委員会の先生方から貴重なコメントをいただいた。記して感謝を申し上げます。

す。最後に、ご逝去された恩師福井勝義先生には調査・研究のみならず研究会の立ち上げ時に叱咤激励、ご指導をいただき、そのお陰で成果の一部をまとめることができたことに、衷心より感謝申し上げます。

●注

*1 本論で用いている公共空間という用語は伊藤(2004)の定義に基づく。伊藤は「公共空間とは、国家大の空間から私たちの身の回りの空間まで含む」と指摘し、その特徴は身体性に根ざした「生活世界」から立ち現れてくるもので、かつ常に公共空間へと開かれた領域であると述べている(伊藤 2004: 78)。

*2 本企画は二〇〇八年度地域研究統合情報センター全国共同利用研究プロジェクト「移動と共生が創り出すミクロ・リージョンリズム」(代表・王柳蘭)の一環として、文化人類学と歴史学をディシプリンにもつ研究者を中心にそれぞれの事例を提示しながらミクロ・リージョンの理解について議論を重ねてきた成果の一部である。

●参考文献

アーリ、ジョン(2006)『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』(叢書ウニベルシタス)、吉原直樹監訳、法政大学出版局。

石川 登(2008)『境界の社会史——国家が所有を宣言

するとき』京都大学学術出版会。

伊藤洋典(2004)『公共空間としての「地域」』岩岡中正・伊藤洋典編『地域公共圏』の政治学』ナカニシヤ出版、五二—七九頁。

伊豫谷登士翁(2007)『方法としての移民』『移動から世界を問う——現代移民研究の課題』伊豫谷登士翁編、有信堂、三—三三頁。

葛劍雄・曾樹基・呉松弟編(1993)『簡明中国移民史』福建人民出版社。

川田順造(2004)『地域とは何か』『人類学的認識論のために』岩波書店、七五—二六頁。

木村靖二・上田信編(1997)『地域の世界史一〇 人と人の地域史』山川出版社。

クリフォード、ジェイムズ(2002)『ルーツ——二〇世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝・有本健・柴山麻紀・島村奈生子・福住廉・遠藤水城訳、月曜社。

コーエン、ロビン(2001)『グローバル・ディアスポラ』駒井洋監訳、谷多佳子訳、明石書店。

高谷好一(1996)『世界単位』から世界を見る——地域研究の視座』京都大学学術出版会。

——(2006)『地域研究から自分子へ』京都大学学術出版会。

坪内良博編(2000)『地域形成の論理』京都大学学術出版会。

——(2009)『東南アジア多民族社会の形成』京都大学学術出版会。

西井凉子・田辺繁治編(2006)『社会空間の人類学』世界思想社。

林行夫編(2009)『〈境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジ』京都大学学術出版会。

古田元夫(1998)「地域区分論——つくられる地域、こわされる地域」榊山紘一他編『岩波講座 世界歴史——世界史へのアプローチ』岩波書店、三七—五三頁。

松本宣郎・山田勝芳編(1998)『地域の世界史五 移動の地域史』山川出版社。

山本博之他(2008)「特集一 リージョナリズムの現在——国民国家の内と外で」『地域研究』八巻一号、五一—四三頁。

Cloke, P., Philo, C. and Sadler, D.(1991) *Approaching Human Geography*. Paul Chapman, London.

Hayami, Yoko (2004) *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*. Kyoto University Press and Trans Pacific Press. Kyoto and Melbourne.

(おう りゅうらん)／京都大学地域研究統合情報センター・日本学術振興会(RPD)